ヴォルフガング・ボルヒェルトについての覚え書（二）

谷崎英男

二　その生涯（続）

ボルヒェルトの軍隊生活は一九四一年の六月の中旬から、一九四五年の春フランクフルト・アム・マインの近郊でフランス軍の捕虜になるまで、約四年続くことになるのであるが、戦車兵として入隊してからの営庭における訓練や、上官たちの単純さや卑屈な態度を示す戦友たちのあいだにまじって個性を失った人間にならなければならないことや、初年兵としての訓練にともなう様々な屈辱感は彼を無気力な怒りの中へおとし入れたのであった。彼は故郷の友人たちへ抗議の葉書や気のめいるような手紙を書いている。兵舎の絵をスケッチしたむきだしの葉書に「第三帝国のいとも快適なる刑務所より、貴下に最愛なる挨拶をおくる」と書いてみたり、前記のアリーネ・ブスマンにあてた手紙では「こんなことで僕はくじけないでしょう。僕の魂は空想の世界へと逃避します。そこには愛と崇高と芸術と美があるからです。僕が不安を感ずるのは、これから襲ってくるかもしれない物ういメランコリーとハムレット的なあきらめに対してだけです。自由は死にました。すべての自由がです。なるほどわれわれには内部の世界がありますが、われわれはこの上何を信じたらいいのでしょう」と苦衷を訴えている。

ところでこの際注意すべきことは、現在文書として残されているのは、きわめて漠然としていて無害なものだけだということである。もつと烈しい弾劾や青春の怒りの証拠となるべき文書はゲシュタッポの手に落ちたか、後年ボルヒェルトが追求を受けたときに、両親によって破棄されたのである。しかしながらこの時代に書かれたものの中からわずかに救い出された次のような数行の文言からも、かつてはどちらかというとだらしない軽薄者であったボルヒェルトが、抗議し真実を直視する青年に変ったことは明らかであろう。

「短かかったがすばらしかった劇団の時代が終って僕も今は兵士になった。ヨーロッパは騒がしいが、シラーのいう偉大なるパトスによって騒がしいのではなく、大衆の騒音によってやかましいのだ。……現在荒々しくも押しつけられた強制と制服と一様の世界が、僕の心の中に秘められたすべての美しいもの、すべての芸術を破壊している。僕はこのような強制に対して、いきなり激情の反動に駆られて馬鹿な振舞いをしないように、自分の気持をおさえなければならないことがたびたびある。……ほとんど忍耐の限度を超えているのだ。しかしそれでも耐え忍ばなければならないのだ。」

ボルヒェルトのファッシズム的独裁に対する態度の特色はいわゆるロマンティックな反抗といわれるものであろう。今まで述べてきたことでも理解されるように、彼の深く素質に根ざした嫌悪感は以前はありふれたもの、因襲的俗物的なものに向けられていたが、今や彼の憎悪の対象は無教養なむきだしの軍隊生活になった。そしてボルヒェルトのこれに対する反応の仕方は二つの可能性、つまり内面への逃避と外面へ向けられた挑戦、夢の国や思い出への退却と烈しい攻撃の間をゆれ動いている。彼は当時の手紙の中で「僕はとうとう夢想家のように、どんな出来事が起きても無関心にやりすごすようになってしまった。ただ時折まだ傷口が裂けることがあるのだ。そうすると、身も心も自由を求めて絶叫するのだ。……僕の分別がいつも我慢するように注意しなければならない——しかしこれから一体

どれだけ我慢すればいいんだと、捕われた魂は問い返すのだ。僕はどんなことでも甘んじて受けることができるが、この無気力な捕われ人のような境遇だけは我慢できない。今にして僕は僕の全人生が実現するためには、自由が根本条件であることを理解した。……しばしば僕は自分の生命を放棄したいような気持にまでなるのだ。だがそういうとき、僕は『何のために』といいきかせる。死んでしまったって何の役にも立ちはしないのだ！　全くその通りだが、現在の生活というものは生活なんていうものではないのだ！」と書いているが、行間にボルヒェルトの感情が読み取れるであろう。

一九四一年の十一月に、ボルヒェルトは無線通信士としての教育を終って、ただちに東部戦線へ駆り出されることになった。この出発の情景は彼の作品『五月にかっこうが鳴いた』(Im Mai, im Mai schrie der Kuckuck) の中で次のように描かれている。

「われわれが貨車によじのぼると、家畜のにおいがした。血なまぐさい赤い貨車がにおうのだった。すると父親たちはざわめきはじめ、鉛のようにこわばった顔付きで、やけくそに帽子を振った。母親たちは色とりどりのハンケチで限りない悲しみをぬぐった。『カルルハインツ、新しい靴下をなくすんじゃないよ』。婚約者たちもきていたが、彼女たちの口もとは別離の悲しみで痛々しい表情を示していた。そして胸もとも。彼女たちには何もかも悲しみの種だった。彼女たちの心臓と唇はなおも燃え続け、別離の夜の極印は鉛のようにずっと長く消え去ることはなかった。しかしわれわれはあてもない遠方へ向って全く結構な歌をうたい、にやにや笑ったり、蛮声をはりあげていた。それで母親たちの心臓は氷るような思いだった。やがて停車場が、続いて母親と婚約者たちの姿がいよいよ遠く小さくなった。そしてそれから父親たちの帽子も。父親の帽子は『カルルハインツ、達者でな』といつまでも叫び続けていた。」

ボルヒェルトはヴィトブスクにしばらく滞在したあとで、クリン＝カリーニン地区で初めてソ連軍と立ち向うことになった。一九四一年の冬は訪れが特に早く、並はずれた激しさで襲来した。吹雪の日と晴れた酷寒の日がかわるがわるにやってきて、温度は零下三十度から五十度を上下していた。十一月の十六日からはモスコーに対する第二次総攻撃が始まっていた。すでにドイツ軍の中央部隊はモスコーを去る三十粁の地点まで進出しており、第九軍がカリーニンの西南方から突き進んで北方からモスコーを包囲しようと試みたのである。だが十一月の末にはソ連軍司令部は反撃を準備しはじめていた。せまり来る包囲網の脅威から脱するために、まず両ドイツ軍の側面部隊をモスコーの南北で撃退することを計画したのである。そしてカリーニン戦線にあったコーニェフ将軍師揮下の北軍はドイツ軍の北方側面の中央を突破する命令を受けていた。これらの部隊はシベリアから送られてきたもので、装備もよく冬期戦に対して十分な訓練を受けていた。すでに十月三日に、ヒトラーは「私は今日初めて――なぜなら今日初めてそう宣言できるからなのだが――この敵――ロシアは既に打ち破られ、二度と再び立ち上ることはないだろうと宣言する」と勝利の歌声を上げていたが、今やこれが全くの誤算であることが明らかになった。冬期の雪中戦に対してドイツ軍の装備は全く不十分で、アノラックや毛皮や白いカムフラージュ用品や雪靴も不足し、凍傷を防ぐ手段もなく、弾薬も不十分であった。凍死者の数がものすごくふえ、負傷者や戦死者の数を超えるほどであった。しかも増援軍の到着は遅々として進まず、将軍たちは見分けもつかぬほどに白い雪に埋もれた異国の地で絶望感に襲われた。

ボルヒェルトはその作品『僕の青ざめた仲間』（Mein bleicher Bruder）の中で次のように書いている。

「この雪ほど白いものはいまだかつてなかった。ほとんど青いといっていいほどだった。緑がかった青だった。それほど恐ろしい白さだった。太陽はこの雪を恐れてかあえて黄色に輝こうとはしなかった。日曜日の朝がこんなにも清らなことは今までなかったことだった。ただ後方に濃い青色の森があるだけだった。しかし雪は新雪で、動

物の眼のようにきれいだった。この日曜日の朝のこの雪みたいに、白い雪はまだ一度も存在したことはなかった。日曜日の朝がこんなにも清らかなことはなかった。」

ここに描かれている雪は単なる季節的な添え物や自然現象ではなく、果てしない空間のイメージであり、空虚と無を象徴するものであることは明らかであろう。ボルヒェルトはこの外短篇集『この火曜日に』(An diesem Dienstag)の中で数篇の戦場に取材した作品を書いているが、それがどの程度まで実際の体験や情況に基づいているかを明らかにすることは、今日では不可能である。しかし非常に簡潔な短縮された描写ではあるが、その中には実際の体験が折り込まれていることは容易に想像されるであろう。

さてボルヒェルトは翌一九四二年の一月から二月にかけて最初の黄疸の徴候を経験し、左手に負傷して野戦病院に送られたが、激しいヂフテリアにもかかったので、さらに故国のシュヴァーバッハの野戦病院へ転送された。ところがここでまだ健康が完全に回復していなかったにもかかわらず五月に逮捕のうきめを見たのである。兵役忌避の疑いであった。ボルヒェルトはある日のこと、左手の中指にたまきずをうけて歩哨勤務からもどってきた。彼の報告によると、人気のないざん壕の中で突然前方にソ連兵が現われたが、射撃するには距離が余り近すぎたので、そのソ連兵が彼に襲いかかってきて格闘し、その際に自分の銃が発火して左手を負傷したというのであった。ところが軍曹の書いた報告書にはかねてから心よからず思っていた上官の「ボルヒェルトは恐らく自分で故意に傷つけたのだろう」という覚え書がつけ加えられていたのである。そのために彼は逮捕されて「故意に兵役を忌避した嫌疑」によってニュルンベルクの未決刑務所へ送られたのである。

ボルヒェルトはここで三ヵ月以上も独房に入れられ、死刑か無罪釈放しかない裁判を待っていたが、遂に審理の期日は一九四二年七月三十一日と決められた。そして官選弁護人であるヘルマン・クローナー博士の外に、もう一人自

由に選べるチャンスがあったので、彼はかつての文学上の助言者であった前述のアリーネ・ブスマンの夫ハーガーに弁護を引き受けてくれるように頼んだのである。ハーガーが審理の前日にニュルンベルクに着くと、彼は不敵なほどの落ちつきで現われ、告発の理由などには余り注意を払わず、リルケについて語ることのできる人に会えたことを喜び、自分のだぶだぶの囚人服について皮肉をいったりした。その翌日行われた審理の経過については今日では詳しいことまでは分っていない。裁判の書類やハーガーの書いた個人的なメモが一九四三年の夏に爆撃によって失われたからである。だが戦後になってハーガーが申したてた所によると、検察官は死罪を求刑したが、軍法会議の判決は全く例外的に公正で好意的なものであった。ナチ政権を誹謗するような手紙や口頭による発言が告発の材料としてつけ加えられていたにもかかわらず、(検察側は開封された手紙の束をすっかり手に入れていたのである)「法廷は被告人と弁護人が真実を申したてていることを信じ」無罪の判決を下したのである。

けれどもボルヒェルトは無罪の判決を受けても未決拘留のままであった。彼の「反国家的」な手紙や若干の破廉恥な言辞についての判決が下されていないというのである。数週間後にもう一度裁判が開かれ、特に次のような言葉が問題になった。

「二週間前に現われた僕の戦友たちはみんな戦死してしまった。ただ無駄に、いたずらに」

「僕は兵舎というものは第三帝国を威圧する暴君の堅城のような感じがする」

「僕は自分自身が褐色の軍隊のとるに足らない苦力であるような気持だ」

これだけで一九三四年十二月二十日に施行された「国家および党に対する悪意ある攻撃に関する法律」によって、四ヵ月の懲役に処する十分な理由になった。その後この判決は弁護団の提案によって戦場での執行猶予のついた六週間の重い拘留に変えられた。

ボルヒェルトが刑務所を主題にして書いたもっとも著名な作品は彼が最初に出した短篇集の題名にもなった『たんぽぽ』(Die Hundeblume) である。後にバーゼルの病院時代に友人になった前記のコルデスにあてた次のような手紙は、この短篇が形務所で書かれたのでもなく、また構想されたのでもなく、特種な体験から生れたことを示している。

「あなたはこの『たんぽぽ』にでてくるような人間が実際に存在し、彼が二十一才で銃殺を求める告訴団の告発をうけて百日間も独房にとじこめられていたということを忘れてはいけません。百日もです、しかも二十一才で。彼は本当にたんぽぽを摘みとり、そのために罰として一週間の間外の人と一緒に歩き廻ることが許されなかったのです。彼はこういう銃殺がどういう具合に行われるかをはっきり知っていましたし、あれこれのことを思い廻らす百日間もの余裕があったのです。彼は実際いろいろと思案しました。それから四年もの間、彼はこの百日間の体験を毎晩反芻していましたが、突然それをうまく然るべき形式で吐き出すことができたのです。そうです、それでで き上ったのです。百日間の体験からは解放されたのです。こういう風にしてヴォルフガング・ボルヒェルトは彼の最初の物語りを書いたのです。そしてその後にコルデス氏がやってきて、ドストイエフスキーやバルザックと比べて『まあ、そうだね』などといっているという訳です。」

一九四二年の十月ボルヒェルトは拘留の刑期を終え、ザールフェルトにあった旧連隊の補充大隊へ送られ、さらに数週間イェーナへ行った。この時代に書かれた手紙によると、彼はかっての失恋時代と同じような厭世的な気分におちいっていたようである。「毎日かわるがわる襲ってくる気分の変化」をなげいたり、「分裂こそ創造の原動力」などといっている。戦友たちとも余り接触をもたなかった。彼らの心の奥深くにひそむ物質主義や快楽主義が「芸術の美の中にのみ慰みを求める」彼の気にくわなかったからである。ただほんの短い期間ではあったが、彼の兵隊生活には

それまで与えられなかった交友関係に恵まれた。彼はある中尉と知り合いになって初めて刺戟のようなものをうけて豊かな気持になったことを、嬉々として両親に知らせている。この中尉と彼は書物や文学や芸術のことを語り合い、骨董屋をさがし廻ったりした。また一緒に「イェーナのいきな世界を毎晩惑わしたり、最後の数日は昼も夜も最後の一銭に至るまで楽しんだり」した。深刻な会話とのんきな生活の間にそのような数日間が宿営地で経過したが、十一月十七日にはもう自分たちが、ある地へ向って「進行中」であることを次のように知らせている。

「僕たちは故郷で自由な身ですごした数週間が与えてくれたすべての美しいものから再び遠ざかってしまいました。しかし今年の前兆はずっと良好です。……僕はどんな困難にも堪えうるだけの精神的な強さができたような気がします。」

トロペーツの近くで彼は前線に投入され、激しい戦車戦に加つた。彼は戦場の模様を次のように知らせている。

「けれども僕はトロペーツ附近の身の毛もよだつような日々に対してはおじけをほとんど感じなかったと、いわずにはいられません。この戦いでは四日間に五人もの中隊長を失い、僕たちも夜になると、しばしば『明日はまだ日の出がおがめるだろうか』とたずねあったものでした。ほとんどおじけを感じないと書きましたが、土色の姿が急に仲間の間に現われると、僕はたびたび激しい強怖に襲われるのです。というのは僕がいつも頼りにできるのは貧弱で邪気もない軽ピストルだけだからです。つまり実際は全く無装備といっていいからなのです。」

十二月の末にボルヒェルトは両足に凍傷を受け野戦病院へ送られた。その上奇妙な診断不可能な熱病の徴候も現われたので、発疹チブスの疑いがあるということで、スモレンスクの伝染病病院へ送られた。ここは毎日六人の死者が運び出され、窓からは発疹チブスで死んだ七百人の墓が見うけられるところだった。ボルヒェルトはその短篇『この火曜日に』の中で次のように書いている。

「この火曜日に、軍医中佐はスモレンスクの流行病病院の医長にたずねた。
毎日何人だね。
六人です。
恐ろしいことだと、軍医中佐がいった。
そうです、全く恐ろしいことですと、医長がいった。そういいながら二人は顔をそむけあっていた。
……
この火曜日に、看護婦のエリザベートは両親にあてて書いた。
神様なしではこんなことには全く堪えられません。
しかし軍医見習がやってくると、彼女は立ち上った。軍医見習はまるでロシア全土を広間じゅうひきずつて歩きでもするかのように、前かがみになって歩いていた。」

このような悲惨な状態にあったにもかかわらず、前線に比べると病院は戦場へ駆りたてられ、戦場からのがれてきた兵士たちにとっては夢の国であった。病人や負傷者たちはしばらくの間しか残されていない生命をどんなことをしてでも楽しもうとしていた。そこを支配していたのは不安と作られた陽気、さしせまつた死期の予感と高められた生命欲であった。ボルヒェルトの身体はひどくおかされていて、奇妙な熱病の発作が週期的に起ったり消えたりしたために、彼の気分は安定しなかった。少しでも気分がよくなると、彼は刹那的で身体を消耗させるような享楽にふけった。フィーナというロシア人の女と親しくなり、彼女と一緒にスモレンスクの聖堂をたずねたり、彼女から銀の指輪を貰ったことを知らせたり、また朗らかなラインランド生れの女で、彼より七才も年上で、若い男がとても好きだというエリザベートという看護婦のことなども両親に報告している。

一九四三年二月になってボルヒェルトはラドムとミンスク経由で、ドイツへ送り返された。ラドムでは色々な治療を受けても効果がなく、一時間ごとに嘔吐するような状態であったが、そこから送った手紙の中では「たった今、僕は明日病院車でドイツへ帰れることをききました。……きっとこれでいいのでしょう。さもないと僕はここでもまた誰かと婚約しなければならない破目になるかも知れませんから」などと、冗談をいい、病気に負けていない快活さを示している。

三月になるとボルヒェルトはハルツ地方のエレントにある予備の陸軍病院へ送られた。ここでは彼は各方面に手紙を書いているが、その中の一つでは次のように休暇が近いこと暗示している。

「昨日僕はすばらしいハルツの空気の中を一時間散歩しました。けれどもその後では全くつかれ切ってしまいました。そうなるのもあたりまえです。なにしろ上衣が身体のまわりにたれさがるし、長靴の胴にはまだ二人分が入るほどだったのですから。……けれども僕はきっと休暇を貰えるでしょう。貰えなければけんかです。なぜなら僕は二度前線に出たのですから、休暇を貰う権利があるからです。僕はこのことでだまされないように、きっと気を付けます。そうなれば僕に損をさせるようなことはできないでしょう。僕はこういう危険な目にあわないように注意します。」

このように休暇を待望しながら、彼の夢と計画は再び演劇に向けられた。彼は二週間にわたる健康回復のための休暇の外に、なお三週間の前線休暇が貰えるものと信じ、そうなったら「リューネブルクでアーペルの『黄金の短剣』の中の君主の息子の役をやれる」ことを願ったりした。あるいはひょっとすると、前線慰問劇団へ配属され、病院から病院へ移動するようになるチャンスがあるかも知れないと考えたりした。また戦後のことにまで思いをはせて次のように書いている。

「もうこのことは一度あなたにお話したでしょうか。僕はいくつかの途方もない考えに年中とりつかれています。それは劇場を作ろうという考えなんです。もちろん、戦争が終ってからのことですが。それともハンブルクのどこかに小さな古い映画館を借りて、そこに金銭的には貧しくとも、大きな理想をもって一種の小劇場を開くなんて夢物語りでしようか。それは既存の劇場のしきたりをくつがえすという意味でなく、われわれ若い者たちでも独力で演劇ができるんだということを、示すためだけにやるのですが。僕にはうまく行くかどうか分りませんが、意志と情熱さえあればきっとうまく行くと思います。」

健康が幾分回復し、後から加ったジフテリヤもなおり切ったので、ボルヒェルトはその年の夏にイェーナの守備隊へ送られた。そしてここで彼は遂に待ちこがれていた休暇の書類を手にして八月にはハンブルクへ行くことができた。しかしハンブルクはその少し前、七月の二十五日から八月の三日にかけての空襲でその半分が廃墟と化していた。彼はこの荒廃した市街の有様を後にカナダの空軍軍曹ビル・ブルークの名によって、その短篇『ビルブルーク』(Billbrook) の中で次のように描いている。

「彼は大きな交叉点に立っていた。彼はふり返えった。猫や犬は一匹もいないのだろうか？　自動車は一台もないのだろうか？　彼は左方を見やった。猫も犬もいなければ、自動車もなかった。彼は右と前方を見やった。猫も犬もいなければ、自動車もなかった。彼は四方のはてしなく続く通りを見やった。家一軒なかった。みすぼらしい家さえなく、小屋と呼んでいいものさえなかった。孤立して残り、震えながらゆれ動く一枚の壁さえなかった。ただ煙突だけが棒状のチーズのようにおそい午後の空の中に突き出ていた。巨大ながい骨の骨のように、また墓石のように。神を求め、天をおびやかすチーズのように。みじめな脂肪分を失ってぐんにやりくさったチーズのように。どの方向を見やっても、交叉点の四方が何キロメートルも見わたせる感じがした。そして生命のあるものは何

もなかった。何物も。何億という石の破片とかけらとくずがあるだけだった。無慈悲な戦争によって町は容赦なく破壊されたのだった。」

ボルヒェルトはハンブルクに滞在中はいくつかの詩を書いたりしたが、毎夜のようにノイシュテーター通りにあるブロンツェケラーという小さな酒場を訪ねた。ここはボヘミヤンや舞台芸術家や中老の画家や女流歌手や休暇中の将校たちの集る所で、小さな舞台の上では三人のバンドが「ナイチンゲールよ、歌え」とか「お前はわんぱく小僧」とか「船のりはなぜ夜眠れないか」などという流行歌を演奏し、ときには若い、あるいは中年のタレントや寄席芸人やシャンソン歌手や音楽家や詩人が登場することもあった。ボルヒェルトも女流歌手のマリーア・フォン・シュメーデスに、彼の歌が変っていて歌になるからと激励されて、ここで歌をうたったり、詩を朗読したりした。

十月になると、ボルヒェルトはイェーナへもどったが、熱病の発作と肝臓障害が新たにおこったので、兵役に堪えないとみなされて前線慰問劇団へ配属されることになった。そこでカッセル＝ヴィルヘルムスヘーエの除隊部隊へ送られたが、ここで思いもよらぬ不幸に見舞われたのである。ボルヒェルトは除隊の日の前の晩に不注意にも「国務大臣ゲッベルス博士を風刺する」お分れ興行をヒンデンブルク兵舎の三十二号室で催した。ところがこのことを上司に告発する兵隊がいたのである。彼は一九四三年十二月二日附けで、かってニュルンベルクで彼を弁護してくれた弁護士ハーガーにあてて、次のような絶望感に満ちた手紙を送っている。

「彼（中傷者）は自分の報告が重大であるということを示すために、然るべきところへ申し出て、中隊長が私を迅問してそのことを確認するようにはからいました。それで私はまたイェーナへ連れもどされ、ここで未拘留の身になって、人間に言葉をたまわった造化の神をのろっているのです。そうです、今の困難な状況においては私には、あなたに手紙を書いて援助を乞う以外に何が残されているでしょうか。……もしあなたが私のためにして頂け

るのでしたら、どうか私の両親のためにやって下さい。私がもっているたった一つの才能というのは、『不幸な目に会う』ことのように思われます。」

ボルヒェルトは政治的な前科者であったから、最悪の事態、つまり懲役あるいは犯罪部隊への編入を覚悟しなければならなかったので、彼は素行がよかったことを証明する書類を集めるように努めた。実際予審で彼にいくらかの希望が与えられるように見えた。ベーレンベルク＝ゴッスラー出身の法務将校であった中尉の人が自分の身の危険をもおかして、起訴事実を和らげ、中傷をなだめるように努力してくれたからである。この中尉は犯罪事実を政治的には些細なことであるように見て、罪を軽くするために利用できるすべての材料を集めて、拘留命令を取消すようにうながした。ボルヒェルト自身も弁護士に「あなたが私についての判定をお読み下されば、きっと私が騎士十字勲章をもらってもいいと、お考えになられることでしょう。このことが少しでも私の助けになってくれればいいと思っています」と書いているほどであった。それにもかかわらず一九四四年の一月の初めに、ボルヒェルトは再び拘留され、イェーナからベルリンのレールター通りにある未決刑務所へ送られたのである。

一月三日にベルリン国防軍司令部法廷の発した起訴および拘留命令によると、彼は「強力な自己主張を求めるドイツ国民の意志を麻痺させ、破壊しようとした疑いが十分である」ということであった。そしてその理由として一九四三年十一月三十日にカッセル＝ヴィルヘルムスヘーエの除隊部隊において、戦友たちの前でゲッベルス国務大臣を風刺して次のようにいったことをあげている。

「ドイツ国民は安んずるがよろしい。うそは短い足をもつ（註：うそはすぐ馬脚をあらわすを意味する諺。ゲッベルス宣伝省の右足が短かかったことを風刺している）。しかしながらわが整形外科医はわが右足を正常な長さに引きのばすのに成功した。国民同胞諸君ならびに諸女よ、われわれの指導部は諸子に風通しのよい明るい住いを約

束したが、その約束を果した。諸子は今や住いをもっている。ドイツ軍人は最後の弾薬のつきるまで戦うであろう。そして大競走に打ち勝つであろう。諸子は余が歩行困難なるが故に、その際先行するのを許されよ。」

ベルリンの数ヵ月は地獄に等しい生活であった。囚人たちは連合軍によるベルリン空襲の際にも地下室へ避難することは許されず、大空襲を死の恐怖の中で迎えなければならなかった。食事も貧弱でしかも少なく、医師の治療もひどく、衛生状態も悪かった。ボルヒェルトにとっては、特に読む書物がないということが苦痛で、シェイクスピアの『リチャード三世』を送ってくれるように頼んだりしている。そして本を送ることが困難だということが分ると、両親に『ファウスト』を手紙に書いて送ってくれるように頼み、「人間が精神的な食物をどんなに渇望するかは、ほとんど信じられないほどです。しかもこの空腹はすきっぱらの胃がぐうぐういうのよりもっとたちの悪いものです」と書いている。

この未決拘留はどうなるのか分らないまま、無限に長く続くように思われた。彼は自分の身がどうなるか、全く分らなかったし、政治的および軍事状勢の切迫が判決に不利な結果をもたらしはしないかと恐れたりした。七月の二十日以後になって逮捕されていた人が数人ベルリンの西北にあるモアビートにある刑事裁判所へ送られたときには、刑が一般的に重くなるのではないかと考えざるをえなかった。その上ボルヒェルトのために尽力してくれる筈だったイェーナ時代の中隊長が突然尻込みし、あたりさわりのない言葉で口をにごす始末であった。ボルヒェルトを襲った完全に受身な無力感は次の弁護士ハーガーにあてた手紙にはっきり読みとれる。

「それでもあなたはもちろんすべての解決の糸を手にしておられ、あなたのよき理解と大きな分別によって、私の運命のあやつり人形を、私に一番都合よく行くように導びくことができます。」

とうとう九月の四日に法廷審理の日が決められた。ボルヒェルトは黄色い顔をして衰弱した姿で法廷に立った。弁

護士のハーガーは次のように予断を修正し、明白な事実だけを明るみに出すべく弁論をふるった。

「被告は戦友たちの前でいわゆるふざけをやったのでありますが、その内容については被告自身も否認し、そのような行為を全く『みだらな行為』と呼んでおります。それにもかかわらず、もし被告が発言の内容に似たことをいう衝動に打ち勝ちなかったとするならば、それはただ彼がその少し前に戦友たちの夜会において、ある下士官が演じた悪ふざけを戦友たちにみせてやりたいという再現の喜びから行ったという事実からのみ、説明さるべきものであります。調書四において照会に答えている准尉は、被告が『戦友や上官の言葉や態度をまねる』ことが好きだったことを証言しています。その晩には兵舎においてはあらゆる種類と性質の悪ふざけが行われ、事実が物語られました。そのため被告は自分のすぐれた演戯力を示そうという衝動にかられたのです。彼の職業は俳優であります。彼はおよそ五十回も、戦友たちの夜会においてアナンサーとして協力しました。彼にとって関心事であったのは、その内容ではなく、彼が持ち合わせていた物を戦友たちに見せる形式だったのです……

調書において見出される戦友たちの評価の中にも、被告に政治的確信にかけているとか政府や軍事的指導に反対を表明したという声は一つも存在しません。それどころか、戦友であり、かつてのヒトラーユーゲントの指導者であったヴェルデ兵長はボルヒェルトが運動の基盤に立っていることを確信する旨、強調しております。また見習士官のヴィムマーは、ボルヒェルトが悪意ある政治的な冗談を決していわなかったことや、常に自己の練成に努め、前線においては困難な状況をも与えられたものとみなし、これをのり越えようと努力したことを証言しております。

弁護団にとってもっとも重要であると思われるのは、戦死されたシュトゥム少尉の前線における評価であります。これによれば、被告は前線において十分な指揮をし、その前科をつぐなうべく努力したことを、簡明にはっき

り確証しております。前線部隊は被告の行動を認めて、戦車戦記章と東方軍メダルを与えております。

最後に一九四三年八月に被告が両親にあてて書いた手紙の写しと、被告が新聞に寄稿した『ある友人のための鎮魂歌』に注目していただきたいと思います。被告の真情はこの印刷された文言の美と真剣さの中にあらわれているのであって、兵舎における政治的なからかいの中にあるのではありません……」

判決は九月七日に下され、九ヵ月の懲役（五ヵ月の未決期間を算入）の刑に処せられたが、前線勤務のために執行猶予を与えるという但し書がついていた。

ベルリンにおける刑務所生活がニュルンベルクの拘留時代と異なっていた点は、独房でなく、ほかの囚人とこみの部屋にいれられたことであったが、このことは一日一日すぎて行く単調さを和らげるというよりはむしろ高めるものだった。外の囚人たちの態度の中には驚ろくほど機械的な繰返しの動作があらわれていて、千篇一律の強制は独房にいるよりも苦痛に感ぜられたのである。前記の『たんぽぽ』とならんで全集にのっているもう一つの刑務所を材料にした短篇『僕らの小さなモーツァルト』（Unser kleiner Mozart）（遺作集にはまだこの外三篇がある）の中では七ヵ月も窓辺に立って外をみつめることしかしないリービッヒという男のことが次のように描かれている。

「朝の四時半から夜の十二時まで、市電は三分毎に走る。そしてその度毎にスピーカーを通してプラットフォームへ女の声が叫んだ『レールター通り、レールター通り』。それが風にのって僕たちの所へも伝ってきた。朝の四時半から夜の十二時半まで。八百回も、『レールター通り、レールター通り』と。

窓際にはリービッヒが立っていた。朝になるともう。お昼はもちろん、午後もずつと。そして限りない夕方も。『レールター通り、レールター通り』。

彼は今はもう六ヵ月も窓際に立っていて、その女の方を見やっていた。あそこのどこかに彼女はいるに違いな

い。たぶんすんなりした足をして、胸のふくらみもあって、ちぢれ毛で。たぶん彼女の姿を想像できたのだろう。」

このベルリン時代にボルヒェルトは、共同房の不愉快な生活であったにもかかわらず、たくさんの詩や劇を書いたようであるが、今日ではほとんど何も残っていない。家へ送った詩を書いたノートも輸送の際に紛失してしまったらしい。

一九四四年の九月に前線勤務の執行猶予で釈放されると、まず最初に再びイェーナへ行くことを命ぜられたが、ここで彼には二三週間の静かなオアシスのような時間が与えられた。彼は自分が「解放されたような」気がしたが、「自分の足で立ってみると、まだ自由を束縛されているよう」な感じがした。「僕は八ヵ月も自分のことばかり余りにもかかわっていたせいか、全く逆の境遇におかれて最初の日の今日は自分の頭がどこにあるか、まだ分らないほどです」と彼は書いている。

この期間のボルヒェルトについて一つのエピソードが残されているが、彼の軽はずみな性格の一面を物語るものといえよう。それはあるフランスからきた婦人労働者との友情関係であった。兵隊たちには強制義務のある外国婦人と親しくなることは禁じられていたが、彼はあえてこの禁令をおかしたのである。それは週間ニュースがフランスの消防隊の記念祭の行進を映し出していたある映画館で始まった。観衆が見なれない行進のスタイルを面白がって大笑いしはじめたとき、ボルヒェルトは自分の二三列前で若い娘がしくしく泣き出したのを認めた。彼は席を代って、泣いている理由をききただすと、その娘は観衆が笑ったので腹を立てたのだということが分り、彼はドイツ人によって与えられた悪印象をぬぐうように努めたのである。もちろんこの友情関係は短期間しか続かず、家に送ってくれるように頼んだ手袋が到着したときに、彼はパトロールにつかまり四週間の外出禁止をうけて兵舎にとどまらなければならなかった。このエピソードはほとんどそのまま『マルゲリーテ』(Marguerite)という小品の中に描かれているが、次

のようなでだしで始まっている。

「彼女は美人ではなかった。けれども彼女は十七で、僕は好きだった。本当に好きだった。彼女の手はいつも冷たかった。手袋がなかったからだった。」

そして次のような悲しい結末に終るのである。

『あなた来ないの？　四週間も？　だめなの？』

『来られないんだ、マルゲリート』

それ以上のことは僕には分らなかった。だがマルゲリートにはそれだけで十分だった。

『いいわ、結構よ。あたしがこれからどうするか分る？』

もちろん僕には分らなかった。

『これから自分の部屋へ行って、顔を洗うのよ。顔全体をすっかり。そうよ。それからきれいになって、新しい恋人をさがすのよ。そうよ。』

そういって彼女は闇の中へ消えていった。すっかり――永遠に」

さてボルヒェルトが刑期を終えて前線に投入されるまでの間に、彼には色々な心境の変化が起ったようである。その一つは故郷ハンブルクに対する郷愁であった。それまでボルヒェルトは自分の生れた都市であるハンブルクに別に大した愛着をもつこともなく、ハンブルクの人間として話しかけられると、喜びよりはむしろ嫌悪を感じていたが、この時代の手紙には「僕はハンブルクが大好きになったし、自分が全く熱狂的なハンブルク人」であることを感ずるといい、「もし僕が幸運にもこの途方もない大戦争に生き残されたら、どんなすばらしい氷河やぶどう山をもつてきても、僕らの霧につつまれ雨に濡れたハンブルクが一番だということを、忘れないようにしよう」と書いている。

もう一つは今までの漠然と絶対的なものを求める態度に代って素直に物事を歌うような姿勢が、求める理想の前に徹底的に挫折した後の澄んだニヒリズムともいうべきものが見られることである。この覚え書の冒頭にかかげた次の詩はこの時代に友人カルル・アルベルト・ランゲ（Carl Albert Lange）にあてた詩の一節であるが、この間の心境を語るものといえよう。

Ich möchte Leuchtturm sein
in Nacht und Wind,
für Dorsch und Stint
und jedes Boot–
Und bin doch selbst:
Ein Schiff in Not!

また次のような手紙の中の文句は挫折からえられた行動的ニヒリズムをいいあらしたものと考えられる。

「僕の現在の健康状態では余り長く生きることはできないだろう。……たとへ僕が仕事を三十才までに終えてしまはなければならないとしても、あるいはまた何も達成することができないとしても、僕はそれに責任をもつでしよう。年を取って人生をちょろちょろ楽しむよりは、全的に生きて死に切ったほうがましです。」

所で一九四三年一月三十一日のスターリングラードにおける独軍の降伏を契機としてドイツは崩壊の一路をたどることになったのであるが、既に一九四四年六月六日には米英軍がノルマンディに上陸し、橋頭堡を確保した。七月二十日はヒトラー暗殺未遂事件が起り、八月二十三日にはパリを放返している。一九四五年になると、大規模なソ連軍の攻撃が開始され、二月にはオーデル川以東のシュレージェン地方がソ連軍の手に帰した。同じ頃西部戦線の連合軍

も攻勢をとり、ライン川を渡河して南部ドイツ諸州、ルール地方、下部ザクセンを占領し、五月の初めにはエルベ川の岸に達した。ソ連軍に包囲されたベルリンでは四月三十日ヒトラーは自殺し、五月二日ベルリンが降伏し、その後七日に各地にあった全ドイツ軍が降伏したのである。

このようにドイツ国内が戦乱にまき込まれてしまったために、この頃のボルヒェルトの消息についてははっきり分っていないが、一九四五年の初め頃ボルヒェルトの中隊はマイン川の南の戦線に投入されたといわれている。しかしながら将校たちは輸送の途中でこっそり逃げてしまったので、その年の春には下士官によってやっと統制されていた烏合の衆ともいうべき一軍はフランクフルト・アム・マインの近くでたちまちフランス軍に捕えられたのである。兵隊たちはフランス軍の捕虜収容所へ送られるために貨車に乗せられたが、森の中を通っている間に、ボルヒェルトを含めて二三人が飛び下りて逃げることに成功した。

ボルヒェルトは『われらが宣言』(Das ist unser Manifest) の中で敗戦の現実を次のように描いている。

「鉄かぶとを取れ、鉄かぶとをぬげ――僕たちは負けたのだ。中隊はちりぢりに四散してしまった。中隊も、大隊も、軍隊も。大部隊が。……僕たちはもはや笛に合わせて歩み出たり、どなられて『はい、分りました』などということはないだろう。……僕はいつでもそうしたいときに、泣き、ふんをし、歌をうたうだろう。しかし突進する戦車の歌や、エーデルヴァイスの歌を僕たちはもはや決してうたうことはないだろう。……そして将軍が戦いの前に、僕たちに向って『おい、お前』ということはないだろう。恐ろしい戦いの前に。……僕たちは二度とみんなで一緒に行進することはないだろう。なぜなら今からは、みんな一人で行進するのだから。」

ボルヒェルトは余り親しくはなかった仲間の一人と北へ向って血路を開いて進もうと考えた。アメリカ軍に捕えられて除隊証明書を求められたときに、ボルヒェルトは拘留されていたときの書類を示し、このおかげで通過すること

ができた。いつも北へ進む連合軍の戦車の後について二人の仲間は進み、ボルヒェルトは病いの身を故郷へ向ってひきずるように歩いたのである。農家で平服や市民として生活するのに必要な品物を手に入れ、大低はわらの中で夜をすごし、旅館にとまるようなことはめったになかった。ある時ヴェストファーレンの地主の家にきたときには、ボルヒェルトが職業をなのると、いっもは追い返されるのに、暖かく迎えられた。そこの女家主が彼の面倒をみてくれ、品物をくれたりして引きとめようとしたが、彼は限りない懐郷の念にかりたてられて、突然挨拶もしないで故郷へ向けて出発してしまったのである。彼が自分たちの世代の歌を美しくうたい上げた作品『別離なき世代』(Generation ohne Abschied) の次の一節はこの時の体験によるものであろうが、戦争にかり出され運命にもてあそばれた彼の世代の姿を自分の体験を基礎に象徴的な形で巧みに描いている。

「僕たちはスモレンスクの聖堂の下で出会った。僕たちは男と女だった。——それから僕たちはおたがいにこっそりと逃げるようにして別れた。

僕たちはノルマンディで出会った。親子のようだった。——それから僕たちはおたがいにこっそり逃げるようにして別れた。

僕たちはある晩フィンランドの湖のほとりで出会った。そして将来をいいかわした。——それから僕たちはおたがいにこっそり逃げるようにして別れた。

僕たちはあるヴェストファーレンの農地で出会った。そして楽しく病いの身を養っていた。——それから僕たちはおたがいにこっそり逃げるようにして別れた。」

ボルヒェルトはヴェーゼル川を超え、シュタインフーデル湖のそばを横切り、リューネブルクの荒野を抜けて、エルベ川へ向けて進んだ。途中でアメリカ軍に出会ったが、逮補されないように狂人の真似をして、片足をあげ、穴の

あいた傘をひろげて道化じみた歌をうたった。すると本当の馬鹿者あつかいにされて逃がしてくれたこともあった。ツォレンシュピーカーの近くで船に乗ってエルベ川を渡った後、熱病にかかり六百粁の長い辛苦のために疲労困憊の極に達しながらキルヒェンヴェルダーに到着し、次の日にはやっとのことでクルスラックにたどりついた。そこへ母親が迎えにきてくれてハンブルクへ連れていってくれたのである。

生れ故郷ハンブルクに対する限りない愛着の気持をボルヒェルトはその作品『ハンブルク』(Hamburg)の中で次のように書いている。

「ハンブルク—それは単に石と屋根と窓と壁かけとベッドと街路と橋と街灯の集りだけではない。それは単なる工場の煙突と自動車の警笛だけではない。——単なるかもめの笑い声と市内電車の叫び声と鉄道のどよめき声だけではない。——それは単なる船のサイレンときしむクレインとののしり声とダンス音楽だけではない。ああ、それはそれ以上に限りないものなのだ。それはどうしてもここにいたいというわれわれの意志なのだ。」

「ふるさとは遠きにありて思うもの」と歌われているが、故郷をなつかしむ偉大な文学は概して故郷を追放されたものや故郷を離れてあてどもなく放浪する人たちによって創造される場合が多いが、故国ドイツを追われたハインリッヒ・ハイネ(Heinrich Heine, 1797–1856)以来ハンブルクがこのような熱情と心酔をもって歌い上げられたことはなかったであろう。

五月の十日にハンブルクへ戻ったボルヒェルトは戦争前に自分がいだいていた希望、つまり演劇の世界へ自分の生活を結び付けようと考えた。彼自身そもそも自分が役者として進むのか、それとも詩人として立つのかまだ心にはつきり決めていなかったが、とにかくまず生き抜いて行こうという気持にかりたてられたのである。彼は色々な計画を作り、何か新しい動きが見られるとどんな場合でもそれに参加しようと試みた。九月の末と十月の初めには「港の水

夫」(Jannmaaten im Hafen) というキャバレーで喜劇役者として登場し、十一月には女優のロッテ・マンツァルト(Lotte Manzart) や、ヴィオラ・ヴァーレン (Viola Wahlen) や放送解説者のルート・マルヒョー (Ruth Malchow) や俳優仲間のハンネス・ティーネルト(Hannes Thienelt)と一緒に、アルトーナ通りに「喜劇座」(Die Komödie) を設立し、お金を集めたり、上演可能な劇をさがしたりした。「喜劇でなければならないという訳ではありません。けれども僕たちの演劇プランの誤りは苦しめられた人間に、さらに苦しめる問題を課そうとしていることです」と彼はその心境を吐露している。同じ十一月にかっての演劇の師であったグメーリンがレッスィングの『賢者ナータン』(Nathan der Weise) の上演の演出助手としてボルヒェルトをさそってくれた。これは彼を感激させるような仕事であったが、不運にももはや彼の健康はこの仕事に堪えられなくなっていた。その後間もなく彼は壁で身体を支えながらやっと歩くことができるほどになっていたのである。

一九四五年の冬からボルヒェルトは遂に床につくことを余儀なくされ、この時からその死に至るまでほとんど始終ベッドにしばりつけられることになった。肝臓がふくれ、背中が痛み、熱病の発作が頻繁にあらわれ、どの医者にもその原因がつかめなかった。それでも彼は努めて健康な人間のように振舞い、病気をあざ笑い、慰めさや同情を不気嫌な様子で退ぞけた。アルスタードルフの病院へ行ったときも、医者はどうにも手の施しようがなかった。彼の病気にはどんな治療法もなく、診断の結論さえつかなかった。彼自身はソ連にいた時にかかった黄疸のことやマラリヤのことを話していたが、最後にバーゼルの病理学者のヴェールデマン教授の診断によってやっと、彼は肝臓炎にかかっているのではなく、彼の体質からくる過敏性の肝臓が長い栄養障害によって機能を行えなくなったことが明らかになったのである。

一九四六年になって彼は病院をかえ、エリザベート病院へ移ったが、ここで一月二十四日に突然今までの詩作とは

全く関係のない散文の傑作『たんぽぽ』を何の準備もなしに一気に書き上げたのである。自分が完全に詩人たるべく選ばれていると信じていた人間が、全く経験のない散文の領域で一躍作家になってしまったのである。彼自身にもどうして自然にうまくそうなったが分らず、「僕はまず散文になれなければならない。散文は僕にはどうも緩漫すぎる」と書いているほどであった。ボルヒェルトはこの病院でその外三つの短篇を書いている。原稿用紙も満足にないような時代であったから、手紙の裏やメモ用紙や封筒や厚紙の上に書くような状態であったにもかかわらず、彼は残されたすべてのエネルギーを書くことに集中した。「僕は少しでも気分がはっきりしているときは、五分間でも利用せずにはいられない」と彼は書いている。

エリザベート病院での生活は気むずかしい看護婦の監視のもとで苦しんだが、遂には治療法のことで医者と衝突するようになった。当時は奇蹟の薬といわれていたペニシリンのことを聞き、やっとのことで英国人から十万単位のペニシリンのアンプルを二つ手にいれたにもかかわらず、医者は使うのをためらったのである。彼は怒りの気持を次のようにぶちまけている。

「僕はこのE氏には全くうんざりした。昨日から僕はまた熱が出た。それなのに僕がペニシリンが手に入ったことを知らせると、この男は『まずレントゲン照射をやってみましょう、それから少し様子を見ましょう』というんだ。……

またレントゲン係りの医者とも長い間詳しく議論したが、彼は『家へお帰りなさい。この病院はあなたの魂を重くするだけです』というんだ。……だから僕は土曜日か月曜日に出て行こうと思う。ここにいたって何になるだろか。」

両親が家へ連れて行く際に、可能な治療法がすべてつくされたかどうかたずねると、「息子さんをここからお連れ

になって下さい。私たちは息子さんを助けることはできません」といわれた。「それは生きられる希望がないということですか」とさらにたずねると、「そうです、まだ一年もつかも知れませんし、場合によっては三日しかもたないかも知れません」というのが答えだった。

ボルヒェルトは復活祭の日に再び家の自分の部屋へ戻って大喜びであった。自分の部屋で色とりどりのもの、おみやげや記念品や化石や絵画にかこまれると、ほっとした気分になった。病気に倒れても彼はみんなと一緒にやって行ける希望を捨ててはいなかった。熱病がちょっとの間でもひくと、寝床から起きて家具によりかかって家の中を歩き廻ろうとした。朝になると、重い身体を引きずって洗面所まで行き、毎日のようにきちんと洋服を着せて貰った。両親や友人たちに自分の元気な姿を見せたいと思ったからである。また一時はハンブルクの出版社ヘルメス社のために原稿審査をしたり、『フライエン・プレッセ』紙に書評を書いたこともあった。

とにかくボルヒェルトは残った生命力をすべて燃やしつくすことによって、この病気から抜け出ることができると何回となく確信した。たった二回だけ彼は外出したことがあった。一度は友人のベルンハルト・マイヤー＝マルヴィッツ（Bernhard Meyer-Marwitz）がブレッヒトの『三文オペラ』が上演されていたハンブルク＝アルトーナへ連れて行ってくれた時である。しかしこのときは入場券をまちがえていて、もう一度外出することは不可能であった。もう一度はボックス美術館のバールラッハの展覧会を熱のない日に訪ねたことである。彼は苦痛のために肩を傾けながら、友人たちに支えられて展覧室を廻ったのであった。

家にいて訪問客がくると、朗らかな態度で接し、笑ったり、将来のことや自分の計画のことを話したりした。自分の病気のことは語らせず、過去のこと、戦争や拘留時代のことについてはあまり話したがらなかった。そこには明るい顔付きをした楽天主義者と暗い歴史を負った男、朗らかな若者と無気味な作家との間の断層がはっきり観取される

が、ボルヒェルトは自分の性格の二重性をはっきり意識しており、彼の作品の至る所にこのようなジキルとハイド的な対比が見られるのである。その一例に作品『コーヒーの定義はない』(Der Kaffee ist undefinierbar) の中の人物の次の言葉があるが、役者としての体験がにじみでていて興味深いものである。

「それは二元論です。分りますか？　典型的な二元論です。われわれは誰もが自分の体内にイエスの部分とネロの部分を少しずつもっているのです。分りますか？　われわれみんながです。彼はしかめつらをして、あごと下唇をつき出し目を小さくすぼめて、鼻の穴をふくらました。『これがネロですよ』と彼は註釈を加えながらいった。それから今度はおだやかな悲しそうな顔付きをして、髪の毛をなめらかになでつけ、何の邪念もないといった態度で少し退屈そうにまごころのこもった目付きをした。『これがイエスですよ』と彼は説明した。いいですか、われわれみんなにあるんです。典型的な二元論です。これがイエスで、これがネロです。そういいながら彼はもう一度すばやくさっと二つの顔付きをしようとした。」

四月三十日には『たんぽぽ』が『ハンブルガー・フライエン・プレッセ』紙に発表され、続いて彼のハンブルク頌歌が詞華集『ハンブルク、川辺のふるさと』(Hamburg, Heimat am Strom) に採用されるに及んで、ボルヒェルトは徐々に世に認められるようになった。そしてそれまでは自分自身や自分の行績に対する不満から、かえって不当に自分を過大評価するような傾向があったが、この頃からは世の賞讃に答え、尊大な要求は控えるようになった。この頃の手紙には彼が自分を「成長しつつある人間」「探求する人間」「途中の人間」と称している個所が再三にわたって見られる。そしてボルヒェルトの製作態度は計画や構成をじっくり考えるというのではなく、彼自らのいわゆる「何の努力もいらない、短い陶酔」のように、熱病的に一気に書き上げるというやり方であった。

一九四六年の十二月にボルヒェルトの最初の詩集『街灯と夜と星』が出版されたが、一九四六年中に彼は約二十九

の短篇を書き、さらに一九四七年になってバーゼルのクラーラ病院へ出発するまでに二十一の短篇が書かれ、その外に製作年同不明の短篇が六篇ある。さらに彼が一九四七年の一月十一日に書き始めたといわれている長篇小説『Persil bleibt Persil』の初めの部分が残されており、ボルヒェルトの名声を高め、その名を不朽にしたただ一つの戯曲『戸口の外で』がこれに加わるのである。

『戸口の外で』は一九四七年一月にたった八日間で一気に書かれた。そしてその効果をためすために、彼は完成してから友人の一団を招いて、すべての役を自分でやってみせたのである。この戯曲がすぐ上演されるなどとは考えてもいなかったので、ラジオ放送と結びつきがすぐに生れて、当時放送劇部門の演劇顧問の主任であったエルンスト・シュナーベル（Ernst Schnabel）が放送のために尽力してくれたことは思いがけないことであった。二月十三日に俳優のハンス・クヴェスト（Hans Quest）が主人公ベックマンを演じて『戸口の外で』の放送劇の初演が行われた。ベックマンの名前はボルヒェルトが友人の彫刻家クルト・ベックマン（Curt Beckmann）から借りたものである。

前年の冬詩集『街灯と夜と星』が出版されてはいたが、この放送劇は各方面に多大な反響を呼び起し、ボルヒェルトを一躍世代の代弁者にしたのである。至る所から、讃美者、批評家、かっての兵隊仲間、出版者、教師、経営者、牧師などさまざまな人達の手紙がやってきた。また外国からやってきた人たちも若き天才を見ようやってきたが、あばらやに住んでいる孤独な人間を想像していて、思いもかけず元気な外貌に接して驚いた人もあった。そのほか雑誌や新聞からの寄稿の申し出や、出版社の問い合わせなど、ひつきもなしにやってきた。

ボルヒェルトは最初のうちはこのブームを嬉しい驚きで迎えたが、やがて余りに多くの訪問客にいやけがさすようになった。仕事が邪魔され、貴重な時間がつぶされたからである。「儀は見せ物ではない」といったり、「どの訪問客も僕を疲労させる。とにかくそうなのだ。訪問客が病人に調子を合わせてくれるのではなく、病人が訪問客に調子を

合わせなければならないのだ。」とも書いている。

一九四六年から四七年にかけての冬は特に病人の健康を痛めつけた。友人や訪問客は燃料をかばんに入れてもってきてくれた。ある人は薪を手押し車にのっけて運んだり、また別の人は練炭を回り道をしてとどけてくれたりした。春になると、病状が幾分和らぎ、よいニュースがもたらされたようにみえた。友人や出版社の人たちがボルヒェルトをスイスへ送って療養させることを企てたからである。しかし色々なお役所的な規則にさまたげられて、外国へ行くことはなかなか実現しそうにもなかった。

むしろ彼の文学作品の方がうまく軌道にのった。四月には最初の散文の作品である短篇集『たんぽぽ』が出版され、『戸口の外で』も二三の劇場に採用されたのである。三月二十三日に彼は亡命作家のベルンハルト・ヨレス(Bernhard Jolles)にあてて、ハンブルク小劇場が、『戸口の外で』を初演物として取り上げてくれたことや、ローヴォルト書店が舞台販売を引き受けたことや、新しくできる映画会社がその映画化の権利を取ったことを知らせている。

その年の夏にはボルヒェルトはまだハンブルクにとどまっていた。役所や規則からくる障害は人々の想像以上に面倒であったし、その間に病人の健康がひどく悪化して病人を送ることなど考えられなくなってしまったのである。熱が引くことはまれにしかなく、身体を起して着がえをするのにしばしば一時間以上もかかるようになった。気分は陰鬱になり、快活さは不気嫌に代った。そして遂には健康な人間がそばにいるのをいやがるようになった。そのために知人の中にも訪ねるのを遠慮するようになった人もいた。訪問客がくると、壁の方へ向いてしまったり、そっけない言葉をはいてお客を追い返してしまうこともしばしばあった。七月に書いたある手紙の中には「僕はずっと前から手紙を書きたかったんだが、激しい熱病の発作にやられて、ここにいると、どんな動作も苦しみに化してしまう熱帯の気候に襲われたような気分になってしまった」と書いている。

九月二十二日、遂にスイス行きは実現の運びになった。ボルヒェルトは熱がなくなり、少し歩くことさえできたので、最初のうちは上気嫌ではあったが、やがて暖房のききすぎた車の中で呼吸困難に悩み始めた。国境の駅ヴァイルで母親と分れて、バーゼルに到着すると、出版業者のコーヴェルツに迎えられて、カトリック系のクラーラ病院の四階にある二百号室へ運ばれたが、バーゼルでのその経過については序章に述べた通りである。

（続）